

## あの子の眼についての法則

あ。(もうすぐ声になると思ったすき)  
間の

心拍数があがり 背中についた顔でまんべんなく笑って  
(世界がこんなにも脆いなんて) 知っても知らなくてもいいことだったのに

澄みきった空気のみが許される下される罪の真下で含み笑いと苦笑いを

一度見たことがあったあの眼 プラットフォームで許されるだけの血を吐いて  
(それはとても美しく) 手を握ることがすべての午後だった

満たされるべきものたち

空白の線 その許された手で

風邪をひいた 無理やり 日曜日 の線を作って 回路

ああ、あ、

まだ はりついてとれない

爪で

ひっかいてあいだに挟まったまま まだ

白状するよいっぺんに

だから無駄なことだけを丁寧に言ってみて

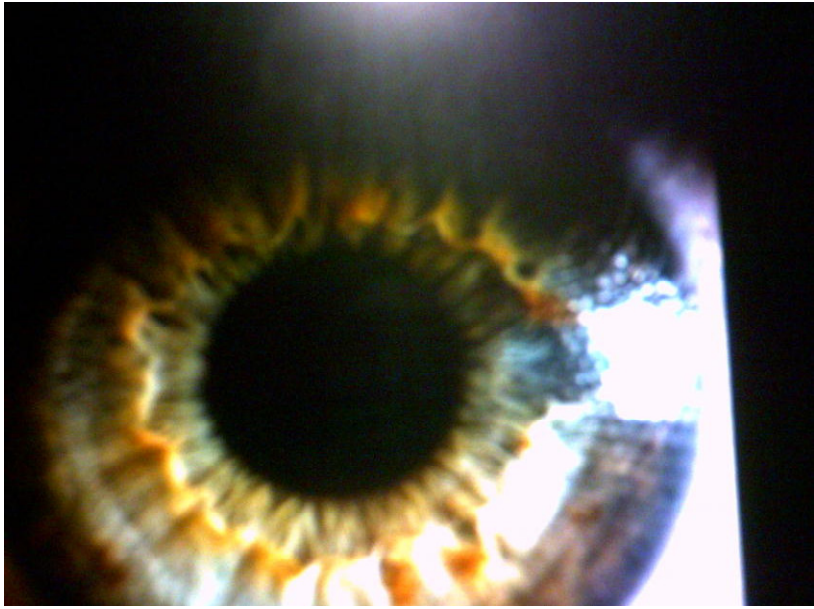
あの子の眼については すでに様々な憶測がまんべんなく染みわたっていて

すでに 様々な 空論が目の前で

独りでに すぎていく 花のうえ 虫の喘ぎ 空虚なあの子の前では

星も崩れ

手のうちを見せることもしない



第一にすべてのものごとをまわりから見るとはなくて  
細部から見るのでもなくて

内側の一枚だけ見ます

次にそれをまとめて窮屈な場所に押しこんで一枚づつ剥がして教えます

それからその中のひとつに穴をあけてもう一枚と結んでから大事にポケットにしまっておくのです

昨日あの子に会いました

昔から大事そうにしているものを見せてもらって可愛いので撫でてあげました

経験に押し潰されそうな網膜は磁場が不安定だからしかたがないのです

昨日あの子に会いました

眼の真ん中が透けてました

可哀想なのでもうひとつだけ眼をあげました

無駄なことなんて何ひとつないことを説明した後で

もう戦争が終わったことを教えてもらえました

眼を落としたあの子に会いました

早くに死んだからとても綺麗でした



花嫁の嘘をきいたことがあるから  
真夜中の端で流星は少し窮屈そう

まだ？ マジワエナイ薬指は切断シタ

余計なからだばかりをあやしている女の声がきこえる

そして無意識の錯綜はやむことはなく

宇宙からの光線をいつも寸前に遮断する

ざらざらと足首についた飾りを見せつけ

海に入っていく 足にからみつく まるで

やせっぽちの赤ん坊みたいな視線

角膜は光からの信号を受けとって手当たり次第輝きたがってる

もう遅いって誰が言った？

紙袋の中は空っぽだったけど九時になったら満員で手を伸ばす隙間さえない

ねえ、息して \*\*\*

(ひとつまみの砂糖)

見ないふりして笑いたがってるくちびる

星屑をくれれば

明日の朝少しだけ豪勢な朝食をたべて

あの子の家まで胃袋を抱えて会いに

デジタル信号が妊婦のからだに突き刺さるとき

、まるで、戦場 サイレンス、

泣く泣くあきらめてあげようか



ろうそくをいっぼんだけ それだけで航路が決まる

出口が（狭くてぬかるんで湿ってる）もう少し近くにあれば

いっそもう戻れないということを察知できていれば海に沈むこともなかったのだ

手はあたたかくてかたい

むらがある何だつてできないことが多すぎて窒息してしまわないで

眼は透明で、いつだって、そばにいる、きみが望むゆめの途中にいるよ

やさしく紡いだこと葉が鼻のうえに落ちる

煌めいてる

無数の 星とくちづけのかたち

かたち

とぶ

世界がうごきだして

コーヒーカップの縁で祝福している

限界が近づいてからが惑星の本番

みて

みて

みて！

世界がうごいて

まんまるな眼球をつつんでる



ひとつ  
ひとつ

交換していく

たっぷりと満たされたその眼

亡くした魂を少しかけて

全体が光るようにたくさんの悲しみをまぶして

ひとつ

ひとつ

づつ

みるみるうちに澄んでくる

海の

蒼さの中でゆらめいてる珊瑚みたいに

黒くて透明な蒼さの中に

みるみるうちに広がってくる

その眼

ゆっくりと

たち現れては消えていく

きつと

波もたてずに一瞬で